

二次元パチ文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

試し読み版

高岡智空

表紙イラスト/マーヤ



痴漢捜査官
六条かすみ

ろくじょう

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『痴漢捜査官 六条かすみ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



痴漢
捜査官

ろく
じょう

六条かすみ

高岡智空
表紙イラスト/マーヤ

登場人物紹介

Characters

ろくじょう

六条かすみ

対性犯罪特別捜査課の捜査官。鉄道や映画館など、暗がりや密室に乗じて女性を狙う卑劣な犯罪者を日々追いつけている。

ろくじょうみづき

六条 瑞樹

かすみの一人娘。かすみに逮捕されたことを逆恨みした外山に誘拐されてしまう。

そとやまいくお

外山郁夫

痴漢をして、かすみに逮捕された男。父親が大物国会議員。

「んっ、んん……ふっ、ううん……っ」

ガタゴトと揺れながら走る電車内に、少女の押し殺したような艶かしい声が小さく響く。昼下がりとすることもあつてかそれほど混んではない車両、けれども席は埋まっております。人の耳へ自分の喘ぎが届かぬよう、懸命に口を押さえて身を震わせている。

その背後で密着するように立つ若い男が、こちらでも声を潜めて少女の耳にささやいた。

「へへっ……頑張るねえ、お嬢ちゃん。けどいつまで続くか……なっ！」

「~~~~~っつっ！ んあっ、はあっ……んっ、や、やめてえ……ひんっ！」

男の指は少女のスカート内に侵入し、それどころかショーツをも太ももまでずり下ろしていた。剥きだしになった秘部にはその無骨な指が食い込み、グチュグチュと卑猥な水音を響かせている。そこから迸る快感と、電車内でこのような行為を受ける羞恥に少女の頬が真っ赤に染まる。だが、気弱で優しい性格の少女は抵抗することも糾弾することもできず、背後からの痴漢行為に、ただ声を殺して耐えることしかできなかった。

男は陰唇を割り開き、指先を幾度となく膣口に挿入させて少女の反応を楽しんでいる。少しでも快感から逃れようと少女は挿入のリズムに呼吸を合わせているのだが、それを乱すように男の指が陰核を弄り、少女はまたも甲高い嬌声を上げそうになってしまう。

数少ない性交渉の経験から、自分は快感に疎いのだと感じていた少女の思い込みを払拭するほどに、男の指技は卓越していた。自分の欲望を満たそうという荒々しい指使いでは

なく、女を感じさせようという意思がはつきりと伝わるほどに繊細なタッチ、そして少しずつ快感を身体に埋め込んでいくような陰湿さを感じられる。溢れた淫液は太ももをドロドロに汚し、引つかかったショーツにまで染みを広げようとしていた。

「んはっ、はああ……だ、だめですう、それ、以上はあ……んっ、んんううっ……」

「おっ、おっ？ イッチまうのか？ くくくっ、いいぜえ……盛大に喘いでくれよ！」

キユツときつく締めつける膣圧と、少女の言葉で絶頂が近いのを感じ取った男は、それまでよりもさらに激しく指を蠢かせ、膣道に捻じ込んだ。

「んんううっ!! んくっ、ひあっ……う~~~~っ!」

カチカチと齒を打ち鳴らし、もれそうになる声を懸命に堪える。その努力を嘲笑うかのように男は背後から胸元へと手を伸ばし、薄手のブラウスを突き上げる豊満な膨らみを揉みしだき、尖った乳首を摘み上げた。少女の肢体は途端にビクビクと躍動し、その不自然な動きに周囲からチラリと視線が向けられる。

「見るよ、いやらしく感じてんのがバレたんじゃねえか？ 周りの奴ら、気にしてるぜえ？」

「いやっ……そんな、感じてなんてえ……んひっ、ひゃあんっ……」

話しながらも男の指はニチュニチュと肉襞を搔きほぐし、柔らかな乳房の形を歪ませる。少女は腰をくねらせ、思わず背後に尻房を突きだす格好になってしまう。

「もう限界つてとこか……よおし、イツちまえよ！ そらっ……」

「そうは……させないわよ、この痴漢！」

男が語気を荒げた瞬間——ほぼ同時に、大人びたハスキーボイスが凜と響き、男の腕は強い力によって強引に引き上げられた。

「なっ!? なんだ、てめえ……」

よほど思いきり握られているのだろう、手首を掴まれた男が痛みに表情をしかめ、背後を振り返る。そこに立っていたのは、スーツに身を包んだ背の高い女性だった。

「自分のしていたことを棚に上げて、よくもそんな偉そうなことを言えたものね！」

強く言い放つと女性は胸を張り、気の強そうな瞳に怒気を浮かべて男を睨みつける。その切れ長な瞳は濡れたように黒く輝き、どこか憂いを孕んだような艶やかな色香を纏わせ、片時も逸らすことなく正面を見据えている。

綺麗に筋の通った鼻梁にほっそりと尖ったあごのライン、グロスで輝く肉厚な唇、長く伸びた艶やかなシャギーレイヤーの黒髪、そのすべてから大人の女特有のフェロモンが感じられた。おそらく二十代の半ばくらいは過ぎているのだろうが、その肌はまるで衰えを感じさせないほどに白く美しい。ほんのりと施された薄化粧は、そこいらの女学生やOLにはない扇情的な雰囲気を感じさせている。

キリッと引き締まった表情もさることながら、女性の身体もまた言い知れぬほどに魅力

的だった。ピッタリと身体に密着した黒のタイトスーツは、その豊満でメリハリのあるボディラインを完全に浮かび上がらせている。白いワイシャツのボタンは上二つが開かれ、Gカップはあろうかという乳房の谷間が意識せずとも目に飛び込んでくる。それでいながらウエストもしつかりとくびれており、その身体の線が尻房の弧を描きながら再び膨らんでいる様子は、男の視線を惹きつけてやまなかつた。

タイトスカートは裾が膝丈よりも少し上で、上品なストッキングを纏った肉感的な脚がスラリと伸びている。尻肉の形を浮かび上がらせたスカート生地張り、スリットから微かに覗くムッチリとした太もも、それを目にするだけで男ならば誰もが欲情することだろう。

「つと……おい、姉ちゃんよお」

あまりに完璧な女の美しさ、そして妖艶さに呆然としたように見とれていた男は、やがて意識を取り戻したように、掴まれていた腕に力を込める。

「自分のしていたことって言われてもなあ……俺はなんもしてやしねえよ、さつさと離してくれねえか？ だいたいなんの権利があつて、こんなことしてんだ？」

振り払おうとしつつも、男はまだ女性を侮つたようにニヤついた笑みを浮かべていた。そんな態度にカチンときたか女性は眉根をつり上げ、自分の手から逃れようと動く腕を、さらに力を込めて捻り上げる。

「その年でもう痴呆？　これで思いだせたかしら、痴漢さん！」

関節が完全に固められているのだから、男は余裕の笑みを浮かべることもなく、苦痛に表情を歪めて情けない声を上げた。

「いでっ、いでででっ！　くそっ……」

すでに言い逃れを聞くつもりはないようで、女性は男の身体を電車の扉に押さえつけ、その背で腕の関節を極めてしまう。そうして男が抵抗をやめたのを見計らい、ようやく、顔を真っ赤にして涙ぐんでいた被害者の少女に優しい声をかけた。

「怖かったでしょう……でも、もう安心して。私はこういう者よ」

女性は片手で男を押さえながら、空いたほうの手で取り出した手帳を少女の前にかざす。

「……対性犯罪、特別捜査課……六条かすみ、さん……」

顔写真とともに印字されたその名を読み上げ、少女はかすみの顔を見つめ返す。

「ごめんなさいね、もう少し早く助けてあげられればよかったのだけど……」

かすみは申し訳なさそうにそうささやくと、男に對するときのような怒りを微塵もにじませず、女神のような慈愛に満ちた視線を少女に向け、勇気づけるように微笑んでみせる。

「い、いえ、そんなっ……おかげで助かりました、本当に……ありがとうございます」

自分を辱めていた痴漢を容易く撃退した女性に微かな怯えを感じていた少女だったが、その正体を知ったことで安堵の表情を浮かべる。

ここ数年で飛躍的に数を増した女性を狙う卑劣な性犯罪の数々を食い止めるべく、経験豊富な婦警から選抜された特殊警察、それが対性犯罪特別捜査課——通称、痴漢捜査官と呼ばれる性犯罪捜査のプロを集めた部署である。結成されて数年と経っていない部署だが、その中でもかすみはエースと言われるほどに検挙率が高く、特殊捜査課の実績はすでに多くの女性たちもよく知るところとなっていた。

「そろそろ駅に着くころね……大丈夫、駅には連絡を入れておいたから、女性職員が保護してくれるわ」

こうして被害者のケアを考えることも、痴漢捜査官の仕事の一つだった。男を取り押さえるときから声を小さくし、また最小限の動きで相手を捻じ伏せているため、周囲の乗客には男女のちよつとした諍いにしか見えていない。

車内アナウンスが響き、乗客たちも荷物を手にして降車の準備を始める。ホームに入った電車は速度を緩め停車し、扉が開かれた。と——。

「くそっ、どけよっ！」

それまでおとなしくしていた男が急に暴れだし、かすみを押し退けるようにして扉から飛びだした。ずっと機会をうかがい、算段をつけていたのだらう、迷うことなくホームの階段へと一直線に走ってゆく。だが——。

「往生際の悪い奴ね、待ちなさい！」

弾かれたようにかすみは男を追って駆けだす。スーツに見合うようなパンプスを履いているというのに、身体能力が桁違いなのだろう、数メートル先を走っていたはずの男の背にあっさり追いつき、その肩をがっしりと掴んだ。

「ひっ……く、くそお！」

男は喉の奥から引きつった声をもらし、肩の手を振り払うように勢いよく振り返るとかすみの身体に掴みかかろうとする。けれどかすみは落ち着いた様子で口元に柔らかな笑みを浮かべ、慣れたように男の腕を片手で受け止めた。

「これまで、そういう行動に出る痴漢がいなかったとも思っているの？」

「は、離せよ！ おい！ 畜生、女だと思ってやりゃあ……くっ」

男は懸命に引いたり押し押したりするのだが、その腕を払うことはできなかった。しかしグズグズしては、後方から駆けてくる駅員や鉄道警察に捕まってしまう。必死の形相で、男はかすみを突き飛ばそうと、もう片方の腕に思いきり力を込める。だが――。

「痴漢に加えて公務執行妨害……しっかりと反省なさい！」

「なっ……う、うわあああっつ！」

——ブウン……ドオッ！

前方に腕を突きだした瞬間、男の身体は高々と宙を舞って一回転し、背中から地面に落下していた。かすみの手加減によって怪我はないようだが、それでも落下の衝撃は肺を直

撃し、息を吸うこともできないまま男は地面で呻きながらのたうちまわる。

「いっ……ぎいいいっつ！　いてえっ、いてえよおおっつ！」

かすみはそんな男を蔑んだ瞳で見下ろし、乱れた髪を手櫛で搔き上げて整えた。

「往生際の悪い犯罪者だわ、まったたく……」

心底軽蔑したようにそう呟くと、駆けつけた駅員たちを誘導する。数名の警察職員と駅員が男を抱え上げ、その腕に手錠をかけると、男はようやく観念したように抵抗の動きを止めた。しかしそれにしては少し様子がおかしく、何事かをブツブツと呟いているようなささやきが、俯いた男の口からもれ聞こえた。

「……？　なにかしら、言いたいことがあるならばつきりと言ったらどう？」

かすみがそう問うと、男は勢いよく顔を上げた。その眼は血走っており、並々ならぬ怒気が表情から溢れ出ている。思わず息を飲んで言葉を詰まらせたかすみに、男は怒りに声を震わせて叫んだ。

「この俺に手をだすなんてなあ……思い知らせてやるよ！　このクソ女あつっ！」

一瞬こそは男の雰囲気にも飲まれそうだったが、すぐに気を取り直してかすみは短く返す。「痴漢ごときが偉そうに……さつきも言ったけれど、反省することね」

事後処理のことで話があるのか、かすみは駅員とともにその場を歩き去る。その背に向けて、男はただジィ……と、恨みと憎しみを込めた粘質な視線を送り続けていた。

「はあ……ああ、疲れたあ……んっ」

自宅のソファに腰を下ろし、かすみはスーツを脱ぎ捨てた姿でその美脚を思いきり伸ばし、その日の疲れを発散するように伸びをする。汗に塗れて肌張りつき、皺だらけになったブラウスからも、かすみのハードな仕事ぶりが伝わってくるようだ。

男を逮捕したあとも、何件かの事件に遭遇したかすみはそれらすべてを解決し、いつものように定時を過ぎての帰宅となっていた。けれどそれほど苦にはならない、自分のしていることが犯罪の抑制に繋がり、そしてなにより――。

「お母さん……いつも、お疲れさま」

「ええ。ありがと、瑞樹」

こうして、一日の疲れを癒やすように冷たい飲み物と優しい笑顔を向けてくれる、大切な一人娘が安心して暮らせる世の中を作れるのだから。

「本当にいい子ね、瑞樹は。気も利くし、こんなに可愛いんだもの」

「お、お母さん……それは、褒めすぎだよ……」

差し込まれたコップから冷たい麦茶を飲み干すと、照れたような笑みを浮かべる娘をじつと見つめる。

（あなた……瑞樹は、こんなにも可愛く、立派に育っているのよ……）

スピーカー越しに耳にしたその痛に障る男の声、それは間違ひなく昨日逮捕した男、外山郁夫のものだった。苛立ちを隠せないかすみは、怒りのまま相手に糾弾の怒声を浴びせる。「あなた……外山郁夫ね？ 父親の権力を笠に着て釈放され、相手の女の子を脅して口止めするだなんて……よくもそんな恥知らずなことができたものね！」

威圧するようなその叫びは、自分の不安を誤魔化すためのものだったのか。微妙な声音の機微に気づいているかのように、外山は嘲笑いながら耳障りな声を返す。微妙な声音

『おゝ怖え……けどいいのかね？ あんたの大事なお嬢ちゃんが、ちゅつとばかし痛い目を見るかもしんねえぜ？ へっへへ』

「っ！ この……卑劣漢！」

ギリッと齒を軋ませ、携帯を持つ手に力がこもる。最悪の想像が現実のものとなつていたショックが身を苛むが、それ以上に外山の卑劣な行いに対する怒りが溢れていた。

「やめなさいっ！ 娘には関係のないことでしょう！ すぐに娘を返せば、このことは不問にしてあげるわ、だからっ……」

そこまでを口にしたところで、電話の向こうからは乾いた舌打ちが響いた。

『ちっ、わかつてないみてえだな……すでに立場はこつちが上なんだよ。それを決めんのは俺だ。これ以上余計なこと言ってみろ、お嬢ちゃんがタダじゃすまねえぜ？』

「そ、そんなっ……」

かすみは、自分のうかつな発言を呪う。だがいまは相手の気を娘から逸らすことが先決だった。相手の言葉からその目的を探り、苛立ちと焦燥を噛み殺しながら、低く震える声でかすみは電話の向こうに問いかける。

「……なにをすればいいの？」

相手に膝を屈してしまつた屈辱に全身が震えた。電話越しに外山がニヤリと唇を歪めたような気がし、かすみはキュツと拳を握り締める。

『おー、物分かりが早いねえ。素直が一番だな、かすみちゃんよお？ くつくく、そんなやまずは、郵便受けの中でも見てもらおうか？』

「くっ……わかつたわ」

いちいち苛立ちを煽るような話し方をする外山に、ハラワタの煮えくり返るような思いを感じつつも、かすみはおとなしく従い、家を出て郵便受けを開いた。が、中には牛乳ビンが一本、そして携帯用のイヤホンマイクが置かれているだけである。

「これは……いったい、どうしろと言うの？」

『面白いことだよ……くっ、くくくくっ！』

外山は堪えきれないというように、腹の底から響く笑い声を上げる。狂気さえ感じるその笑い声に、言い知れぬ恐怖を感じたかすみは、次の外山の言葉で完全に言葉を失った。

『それを男の精液でいっぱいにしてもらうぜ……ただし、電車の中でなあ？』

「お、おい……あれ見ろよ……」

「え？ うっひょり、すげえ格好だな……」

駅のホームにて、周囲からささやかれる言葉に、かすみは頬を染めたまま唇を噛み、ただひたすら羞恥に耐えていた。その耳には、昨日の携帯に繋がったイヤホンマイクがつけられており、携帯は外山と通話状態にされている。

『くくっ……見られてるぜ、かすみちゃんよお？ どうだい、痴女になった気分は？』
「だ、黙りなさい、このっ……くうっ……」

外山の嘲笑にさえ、かすみは満足な言葉を返すことができなかつた。いま自分がどんな姿をしているのか、そしてなにをしようとしているのか、考えるだけでも顔から火が出そうになる。

（最低だわ、こんな姿を……うう……）

昨夜、この卑劣な男に命じられた恥辱行為、それは一晩を置いたことでさらにエスカレートさせられていた。眠れぬ夜を過ごした今朝のこと、目覚めとほぼ同時に受けたメールに従い、かすみは駅のコインロッカーに向かわされ、そこにある衣装を身に着けるように指示されたのだ。恐る恐るといった様子でロッカーを開けたかすみだったが、その目に飛び込んできたのは予想に反し、ただのスーツだった。

だが、安堵したのも束の間、駅のトイレで着替えさせられたその衣装を身に着けた瞬間、かすみは相手の思惑を知ることになる。

(まさか、こんなサイズだなんて……)

普段着ているものより、少なくとも二号は小さいスーツを着たかすみのボディラインは、ピッタリと密着した服の上で完全に浮き彫りになっていた。ボタン一つでギリギリ引つかかった上着の前面は、豊満なバストに引き伸ばされていまにも引き裂けてしまいそうである。その下に白い薄手のブラウスが見えるのだが、それさえも白い肌を思いきり覗かせるほど小さく、当然のようにほとんどボタンが留められない。すでに大量の汗で張りついたブラウスはしわくちゃになって身体に絡みついており、柔肌は衆目に晒されているも同然だった。

懸命に上着の前を引っ張り、こぼれ落ちそうな乳房を隠そうとするのだが、そうすると今度は下半身が無防備になってしまふ。サイズの小さなスーツのスカートは、もはやマイクロミニ程度になっており、ストッキングを穿くことも許されなかつた艶かしい太ももは、そのムッチリと肉づきのよい付け根までが露わになっている。背後から見ると、バストに負けぬほど豊満で柔らかそうな尻肉がスカート生地の際を伸ばして突きだされ、はちきれそうなほどの肉感を見せている。股下五センチもないであろうスカートの裾は押さえっておかなければ、数歩歩いただけでめくれ上がり、その内側を外気に触れさせてしまふこ

とになりかねない。けれどそれだけは、かすみの矜持に懸けて避けなければならないことだった。

(ああつ、ダ、ダメツ……見えてしまうつ……)

片腕で身体を抱きすくめ、もう片方の手でスカートの裾を押さえてもじもじと動く美女の姿は、それだけで周囲の男たちの視線を集めてしまう。その視線を感じ、かすみはますます身を固くして、スーツの中を見られないように隠さなければならなかった。なにしろ、ブラやショーツは最初に着ていた服と一緒にロッカーにしまっているのだから。

『くくくつ、いいぜえ……まるで悶えてるみてえじゃねえか。そうやってよお、俺の味わった屈辱の百分の一でも味わってくれや……』

耳元で響く揶揄の言葉にカアツと首筋まで赤く染めつつも、かすみは気丈に声を張って卑劣な脅迫者を糾弾するように言い返す。

「くつ……覚えていなさいっ！ 必ず、あなたを見つけてみせるわ……っ」

一瞬、外山がどこ近くで自分のことを見ているのではと周囲をうかがったが、それらしき人影を見つけることはできなかつた。それを見透かしたかのように、またも電話からは嘲笑うような声が聞こえる。

『そうだな、もしも俺を見つけることができたらお嬢ちゃん解放してやってもいいぜ……おつ、電車が来たみたいだな。そんじゃ期限は……昼までにしてやるか。いい痴女つぶ

りを期待してるぜ……かすみちゃんよお？ くくくくつ』
 ギリイッと噛み締めた歯を軋ませ、けれど逆らうことのできないかすみはゆつくりと歩みを進め、その細長い密室へ足を踏み入れた。行為中に必ず外山を見つける、その思いだけを胸に刻み込んで……。

弱まった冷房が申し訳程度にかかっているだけの車内は、想像以上に蒸し暑かった。下着を着けていない身体はあつという間に汗に塗れ、真つ白なブラウスが肌に張りつき、その下の柔肌をスーツの隙間から晒してしまう。

「おっわ……なんだよあの女、ほとんど裸じゃねえか」

「へへっ、朝からいいもん見たなあ……」

周囲から時折ささやかれるそんな言葉に頬を染めながら、かすみは牛乳ビンを片手に顔を伏せていた。乗車前までは、娘のためならばどれほど屈辱的であろうとやり遂げてみせると考えていたのに、こうして実際に乗ってしまうと羞恥は極限にまで高まっていた。

(さ、最低だわ、こんなところで……つ)

少し身動きしただけで誰かしらに触れてしまうくらいに混みあつた車内で、命じられたような破廉恥なことなどできるわけがない。しかし、そう思つていても電話が繋がったはずの外山はなにも言わず、そのまま時間が経てば経つほど娘の立場が危うくなることも事

実だった。やがて意を決したように唇を噛み、かすみは視線を上げて周囲の様子をチラチラと盗み見るようにながう。

(あ……いたわ、ああいうコだったら……)

かすみが目をつけたのは、文庫本を片手にした小柄な男子学生だった。壁を背にして立っているその少年の顔つきはおとなしうに見え、なにより周囲に立つ人間は皆、そちらに背を向けているのだ。彼が騒ぎさえしなければ、行為を終えても周囲に気づかれることはないだろう。ゆつくりとそちらに向けて歩きながら、かすみは心の中で少年に謝罪する。
(ごめんなさいね……)

かすみは娘を救うためという名目があるものの、普段から忌み嫌う痴漢たちと同じことをする自分に、嫌悪を隠せなかった。騒ぎそうにない、おとなしうな少年に目をつけ、その身体を公共の場で辱めるなど、警察として……いや、人として許されることではない。そう思いつつもかすみは少年の前に立ち、その身を擦り寄せるようにしながら壁に手をつけて、自分より頭一つ低い少年の耳元に唇を寄せた。

「ん？ ……っ!？」

妙な気配に顔を上げた少年は、驚きのあまりに顔を強張らせる。目の前には、はちきれんばかりの半裸体を見せつける女が立っており、その顔を息がかかるほどの距離に近づけているのだから、その反応は当然だろう。

「な……なんですか、いった——」

少年は驚きと拒絶の入り混じった声を上げようとしたが、騒ぎたてられないようにかすみはその口を閉ざさせる。口を塞いだわけではない、羞恥と屈辱に震えるその手で、少年の股間をズボン越しにそつと撫でたのだ。

「た……溜まつてるんでしょ、若いんだもの……お姉さんが処理してあげるわ」

少年の耳元でそう妖艶にささやくと、かすみはファスナーを白魚のような指先で摘み、ゆつくりと下ろしてゆく。その間も手の平を押しつけ、やや膨らんだ少年の肉棒をマッサージするように刺激することも忘れない。

チラリと少年の顔をうかがうと、羞恥に顔を染めた少年は声もだせないようで、ただブルブルと震えていた。

（ごめんなきいっ……すぐに、すぐに終わらせるから……）

罪悪感に苛まされ、自分の破廉恥な行いに対する羞恥に身を焼かれつつも、かすみはその行為をやめようとはしない。瑞樹を救い、外山を見つけさえすればこの少年には必ず償いをしよう、それだけを胸に、かすみは少年の肉棒をファスナーからズルリと引きだした。

「あ……す、すごい……」

少年の肉棒は、すでにガチガチに屹立していた。しかもそのサイズはかすみが見たことのあるそれより、明らかに大きいものだった。自分の手の平から溢れるほどの太さ、拳を

二つ並べたような長さ、ビクビクと躍動する太い血管、それらを目の前にしたかすみは思わず感嘆の吐息をもらしつつ声を上げた。

「ふあっ……あ、ああ……」

それを聞いた少年が、羞恥のあまり少女のような悲鳴をこぼす。かすみは罪悪感から耳を塞ぎたい衝動にかられたが、行為をやめるわけにはいかなかった。意を決し、その肉棒に直接触れ、マイクを掴むように握る。夫を亡くしてからは触れることのなかつた久しぶりの肉棒の熱い感触は、眠っていたかすみの牝を痛烈に刺激した。けれど心の奥でくすぶる本能の炎を理性で抑え込み、かすみはほんのりと頬を赤らめつつも、その手をゆつくりと前後に扱き立てる。

「ふっ、ううん……さ、さあ、たっぷりだしてね……」

少年の耳に触れるほど唇を寄せ、周囲には決して聞こえないようにボソボソとささやく。電車の中、周囲に多くの人間が存在する空間で自分より一回り以上も年下の少年の股間を弄ぶその姿は、どこから見ても痴女でしかない。そんな自分の姿を考えると、消え入りたくなるほどの羞恥に襲われた。

（み、瑞樹のためよ……仕方ないの、これは……っ）

必死で心にそう言い聞かせるが、少年には決して伝わらない。もしも言葉で真実を伝えようとすれば、それは携帯のマイクから外山の耳に届き、瑞樹に危険が及ぶかもしれない

のだ。

「や、やめてっ……お願いだよ、お姉さん……っ」

少年も周囲に気づかれたくはないのだろう、抗議と抵抗の声を上げるのだが、それはかすみの耳にやつと届くくらいに小さなものだった。それでも方が一周囲に聞こえてはたまらない、そう考えたかすみはやむを得ず少年の顔の前に、自分の顔を近づける。

（お願いよ……静かにしてちょうだいっ）

無言で訴えるも、少年は涙目になっていまにもすすり泣きを上げそうだった。そのとき、かすみの瞳に飛び込んできたのは半開きになった少年の唇……それを見た瞬間、ドキリと心臓が高鳴った。いまにも声を上げそうな彼の口を塞ぐ唯一であろう手段、それを想像したかすみは顔色を蒼白に染めた。

（そ、んな……でも、そうしないと、周りに……くっ）

やるしかなかった。かすみはもう一度少年を見つめると心の中で謝罪し、ゆつくりと少年に唇を寄せてゆく。

「お、お姉さんっ……んむっ!？」

亡き夫以外に許したことのない、桃色の肉厚な唇を少年の唇に重ね、そのままかすみは肉棒を抜き続ける。引かれたグロスを相手の唇にも移そうとするかのように懸命に唇を押しつけると、いつの間にか少年の息が荒くなっているのを感じた。鼻からもれる熱い吐息

が顔にかかり、かすみは思わず劣情を刺激されることになる。

扱く手の動きが速くなり、少年の反応を楽しむかのように口から舌を伸ばし、唾液を絡めながらピチャリと相手の口まわりを舐める。ビクツと少年の身体が跳ねると、申し訳ないと思う気持ちとともに言い知れぬ興奮が湧き起こった。

(はあ……んうっ、は、早くう……射精して、ちょうだい……)

一瞬、目的を見失いそうになったかすみだが、すぐさま自分がなんのためにしているのかを思いだし、頬を染めて恥じ入る。手の平では先ほどよりもさらに大きく膨らんだ硬い肉棒が、昂りを訴えるようにビクンビクンと破裂しそうな躍動を伝えている。

(で、出るのかしら……出るのよね、たっぷりだして……お願いよ)

瞳を潤ませて少年の顔を見ると、泣きだしそうな相手の瞳が映り込んだ。かすみは牛乳ビンの口を肉棒の先端に押しつけ、こぼれそうな先走りを肉幹に絡めながら、人差し指で尿口を弄り、中指と親指で作ったリングを裏筋に添わせ、チュクチュクと小さな水音を鳴らしながら、激しく肉棒を抜き立てる。

唇を押しつけながらも、舌でしゃぶることを忘れない。唾液のねっとりとした感触は少年の官能を揺さぶり、舌の柔らかい動きはまるで疑似フェラチオを体験させているようだ。

「んんっ、んむうう……んふっ、ふうう……っ」

「ちゅっ、ちゅる……ふうっ、んっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>